



Data

監督・製作：陳可辛（ピーター・チャン）

アクション監督：程小東（チン・シウトン）

出演：ジェット・リー／アンディ・ラウ／金城武／シュー・ジンレイ／ウェイ・ツオンワン／クウ・パオミン／ワン・フィウイン／シ・チャオチー／チヨウ・ポー／グオ・シャンドン

👁️👁️ みどころ

呉宇森（ジョン・ウー）監督の『レッドクリフPart I』（08年）、『レッドクリフPart II』（09年）以前の2007年に、陳可辛（ピーター・チャン）監督のこんな名作があったとは！

紀元3世紀の『三国志』は「桃園の誓い」だが、清朝末期1860年代の本作の、「投名状」とは？

リアルで迫力ある合戦シーンも見どころだが、それ以上に注目したいのが、掘り下げられた三者三様の人物像が、激動の時代を生きていく中で織りなす濃厚な人間ドラマとその悲劇的結末。また、紅一点としてそれに絡む、徐静蕾（シュー・ジンレイ）の演ずる役割とは？

太平天国の乱と馬新貽暗殺事件がわかれば、さらに魅力がアップするから、鑑賞後のお勉強もしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 2007年の名作が、今やっと！ ■□■

2008年から2009年にかけては、ジョン・ウー監督の『レッドクリフPart I』『レッドクリフPart II』が中国、日本そして全世界で大ヒットしているが、2007年の中国映画興行収入ナンバー1を記録し、香港電影金像奨8部門を独占し、台湾金馬賞3部門を受賞したのが、原題『投名状』のこの映画。投名状すなわち、義兄弟の契りを交わすのは、龐青雲（パン・チンユン）、趙二虎（ツァオ・アルフ）、姜午陽（チャン・ウーヤン）の3人。

未来のために戦うパンを演じた李連杰（ジェット・リー）は、本作で『ラスト、コーシ

ジョン』（07年）の梁朝偉（トニー・レオン）を抑えて香港電影金像獎主演男優賞を受賞。愛のために戦うアルフを演じた劉德華（アンディ・ラウ）の最新作は、2009年1月29日に観た『三国志』（08年）。そして、友のために戦うウーヤンを演じた金城武は、『レッドクリフ』で諸葛孔明役を熱演。このように三者三様に大活躍だが、そんな3人の名優が結集した名作が2009年5月にやっと日本でも公開されることになった。こりゃ絶対観なければ、そう思って試写会に行ったが、前評判どおりこりゃ名作！

■時代は？テーマは？■

本作の時代は19世紀後半の清朝末期。腐敗した清朝の圧政下で太平天国の乱が起きた激動の時代だ。投名状を結び清朝配下の山（シャン）軍となった3兄弟は、力を合わせて舒城、蘇州、南京と太平天国軍を攻略。リーダーのパンは金の官服を授かり、両江総督に任命されるまでに立身出世したが、その頃3兄弟の運命の歯車はいかに？これが本作のポイントだが、邦題は英題の『The Warlords』と原題の『投名状』を合わせただけの『ウォーロード／男たちの誓い』だから、何の映画がちよっとわかりにくいのが難点……。



(C)2008 TalentaId International Ltd. All Rights Reserved.

■豊富な人材の男性陣■

本作では3人の主役となる男優が揃い踏みするが、その他にも西大後の軍事会議を担う、

ジアン大臣（顧寶明／クウ・パオミン）、ディー大臣（王奎榮／ワン・フィウイン）、チェン大臣（魏宗萬／ウェイ・ツォンワン）という3長老の策略のうごめきに注目。第2にジアン大臣の部下で、魁軍の将軍であるホー・クイ将軍（石兆琪／シ・チャオチー）、チェン大臣の部下で勇軍の将軍であるルー（周波／チョウ・ポー）、そして太平天国軍の蘇州城主であるホアン（郭曉冬／グオ・シャンドン）の果たす役割に注目。

本作が友情と裏切りという生々しい人間模様やアクションと権謀術策というスリリングなストーリー展開を存分にみせつけてくれるのは、重厚なストーリー展開を彩るこんな多彩な男優陣の活躍のおかげだ。

■□■紅一点は？■□■

そんな名作に紅一点として登場するのが、アルフの妻でウーヤンから義姉と呼ばれている徐静蕾（シュー・ジンレイ）扮するリエン。映画冒頭、清軍の将軍であるパン率いる湖軍がホー・クイ率いる魁軍の裏切りによって、太平天国軍に全滅させられるシーンが登場する。そんな中、死んだフリをしていたことによってただ1人生き残ったのがパン。そして、失意のうちに荒野を彷徨っていた時に出会い、一夜を共にした女がリエンだ。うす暗い色調の中、絶望的な気分になっているパンが、やさしくしてくれた女リエンに悲しみと弱さをぶちまけるシーンは圧巻だが、そんなパンをリエンがやさしく受け止めたのはなぜ？また失意のうちに眠りについたパンの側に、リエンが寄り添ったのはなぜ？翌朝リエンは忽然と姿を消してしまっただが、再びパンが生きている実感を取り戻すことができたのは、リエンが作ってくれた一椀のお粥のため？それとも、彼女がみせてくれた心と身体の温かさのため？

そんな紅一点のリエンがアルフの妻だったことによって、その後の①盗賊村におけるパンとの2度目の出会い、②3人の男たちの投名状の契り、③清軍への参加、④太平天国軍攻略への旅立ち、⑤苦難の戦いとその大成功、というストーリー展開の中、3人の男たちにさまざまな影響を及ぼすことに。2009年3月6日に観た『新宿インシデント』ではお飾り的な役割にすぎなかった“四小名旦”（四大若手女優）の1人シュー・ジンレイの、微妙な立場を表現した静かな熱演に注目！

■□■お勉強 その1 馬新貽暗殺事件とは？■□■

本作は激動の時代の中投名状を結んで生き、そして死んでいった3人の男たちの友情と反目と裏切り、そしてそこに絡む1人の女という構図で十分楽しめるもの。しかし、清朝末期の1870年に現実起きた馬新貽（ばしんい）暗殺事件の勉強をするのとは違い、

本作のパンのモデルがこの馬新貽。ウィキペディアによれば、彼は1847年の進士であり、日清戦争（1904～1905年）の講和条約である下関条約を清国の欽差大臣（全

権大使)として締結したことで有名な中国の政治家李鴻章と同期の、文武両道を備えたエリート官僚。彼が両江総督に任命されたのは1868年。両江とは江南と江西だが、両江総督の前身は江南、江西、河南の三省総督。両江総督とはその管轄下に南京を擁するため重要なポストであると共に、管轄下で起きた太平天国の乱に対応しなければならなかったから、むずかしいポストでもあったらしい。馬新貽が衆人環視の下、張文祥によって暗殺されたのが1870年だが、この暗殺者張文祥こそがこの映画で描かれるウーヤンだ。張文祥は頑として暗殺の動機を語らなかったため、馬新貽暗殺事件は清末四大奇案の1つとされ、演劇、映画、テレビの題材として何度かとり上げられたらしい。

馬新貽暗殺事件は中国ではそれくらい有名なお話だから、日本人も少しはそのお勉強を。

■お勉強 その2 『ブラッド・ブラザース』とは?■

本作のプレスシートの中で、アンディ・ラウは「同世代の役者の中で、実際に『ブラッド・ブラザース/刺馬』の監督チャン・チェと仕事をした事があるのは僕だけだろう。彼は、とてつもない監督だ。数々の武侠映画で[男]を語らせたなら右に出るものはいない。」と語っている。また、アンディ・ラウとピーター・チャン監督の間で完全に一致したのが「『ブラッド・ブラザース/刺馬』こそ、彼の代表作だ!」ということらしい。

そこでネットで調べてみると1973年の『ブラッド・ブラザース/刺馬』とは、「ショウ・ブラザース全盛期に君臨した大監督チャン・ツェーの最高傑作ともいわれる、三大スター豪華共演の異色クンフ・ドラマ。史劇をもとにした友情と裏切りの物語が展開する。」もの。また、そのストーリーは「山で出会って意気投合した馬新貽(ティ・ロン)と張文祥(デビッド・チャン)、黄縦(チェン・カンタイ)の兄弟は、義兄弟の契りを交わす。だが、野心家で冷徹な馬は2人のもとを離れ、数年後には一国の将軍にまで昇りつめる。再会する3人。その喜びも束の間、黄の妻が馬と通じたことから、男たちの友情は残酷な結末へと向かう・・・」というもの。

ちなみに、この作品でティ・ロンは第19回アジア映画祭と台湾の第11回金馬獎で主演男優賞を受賞したとのこと。また、ジョン・ウー監督がこの映画で助監督をつとめ、これをもとに『ワイルド・ブリット』(90年)を作ったらしい。これらは今回勉強してはじめて知ったことだが、そんな『ブラッド・ブラザース/刺馬』と本作を見比べてみれば、なお一層興味深いはずだ。

■お勉強 その3 太平天国の乱とは?■

本作では、盗賊村に戻ったアルフが奪ってきた十字架をリエンの首にかけてやるシーンが登場する。また、アルフが山軍の一員として出征する時、お守りだと言いながらリエンがそれをアルフの首にかけるシーンが登場する。これを見て、太平天国軍はキリスト教の信仰を軸とした組織だということがわかれば、あなたはかなりの中国史通。

太平天国の乱のリーダーである洪秀全が、国号を太平天国、自らを天王と称して広西省桂平県金田村で公然と清朝に対する反旗を翻したのは1851年。この反乱軍が民衆からの支持を集めたのは、アヘン戦争で疲弊し民衆への圧政を深める清朝に対する不平不満を吸収したため。他方、中国は広い。桂林、長沙、漢陽、漢口などの各地で清朝軍と戦った太平天国軍が最初に陥落させた省都が武昌でそれは1853年1月。そして、最終目標とした南京を占領し、これを天京と称して太平天国の王朝をたてたのが1853年3月だ。

一時、北京まで攻め上ってきた太平天国軍に対抗するため清朝のディー大臣はやむなく身分不問で民兵を募り、山賊、匪賊、ありとあらゆる人種を清軍に迎え入れた。パン率いる山軍もその一部だ。パンたちの必死の戦いによって清朝軍は少しずつ盛り返し、舒城、蘇州、南京攻略と続くわけだ。太平天国の乱に関する情報は山ほどあるが、本作をしっかりと理解するためには、客観的なそんな時代背景のお勉強が不可欠！

■□見どころ その1 三者三様の人物像と哀しい女心■□

プレスシートによると「ピーター・チャン監督が得意なのは感情、心の壁を描くこと」らしい。しかして本作の見どころの第1は、しっかり掘り下げられたパン、アルフ、ウーヤンという三者三様の人物像とリエンの哀しい女心。夢と野心に燃えたパンは3兄弟のトップとして清軍への参加や800名の兵の決死の戦いなど苦渋の決断をしていくが、実はそこには元優秀な官僚らしい計算と打算が・・・？それに対して、アルフが盗賊村のボスとしてウーヤンや仲間たちから絶大な信頼を得ていたのは、彼が何よりも純真に仲間のことを考えているため。パンにしてみれば、自分には備わっていないそんなアルフの資質は時には羨望の対象になったのでは？さらに、リエンがアルフの妻だとわかった後のパンとリエンの接触模様をみればかなりヤバイことは明らか。誰にも気付かれないうちはまだしも、ある日の2人の目線から2人の仲を疑ったウーヤンが見た光景とは？

他方一番若いウーヤンが一途に投名状を信じたのは当然。この映画は「あの男はこう言った」というウーヤンのナレーションから始まるが、あの男とはもちろんパンのこと。投名状による誓いは「生死を託し助け合い、不幸も苦難も共に乗り越える。義兄弟を傷つけし者には必ずや死を。その者が義兄弟であれ、必ずや死を。天地山河にこれを誓う。裏切りには天誅を。」というもの。ただひたすらこれを信じ実行しようとしたウーヤンに対し、ひょっとしてパンは最初からこれを信じてなかったのでは・・・？

そんな三者三様の人物像が、盗賊村を旅立ち、山軍として何年間も太平天国軍と戦い続ける中、いろいろな歪みを引き起こしたのは仕方がない。しかし、やっと念願かかって南京を攻略し、パンは两江総督になったのに、その時点でパンとアルフ、ウーヤンの間にこんなにも大きな心の乖離が生まれていたとは・・・。その結果もたらされる悲しい結末はあなた自身の目でじっくり味わってほしいが、本作の三者三様の第1の見どころはここにある。

■見どころ その2 リアルで迫力あふれる戦闘シーン■

『エンプレス 運命の戦い』（08年）で久しぶりに監督をつとめたチン・シウトンが、本作ではピーター・チャン監督と組んでアクション監督をつとめている。本作のアクションは、チン・シウトンがアクション監督として張藝謀（チャン・イーモウ）監督と組んだ『HERO』（02年）、『LOVERS』（04年）、『王妃の紋章』（06年）でみせた華麗なワイヤーアクションとは全く異質のリアルで迫力あふれるもの。

最大の迫力ある合戦シーンは、監視役の魁軍がじっと見守る中、決死の覚悟で太平天国軍に突進する800名の山軍の戦い。200丁の鉄砲隊が待ち受けるところへ突進し、後ろから続く弓隊の攻撃にすべてを賭ける作戦だが、どたいそれは無茶。誰もがそう思ったが、予想を大きく上回る気力と獅子奮迅の働きをみせたのが、パン、アルフ、ウーヤン3兄弟とその部下たちだ。800人の山軍が5000人の太平天国軍を打ち破りそうになると、たちまち魁軍もそれに合流したため圧勝。大怪我を負いながらも見事にパンは舒城の大会戦に勝利するわけだが、チン・シウトン・アクション監督による、この血湧き肉躍る合戦シーンが本作の第2の見どころだ。

■見どころ その3 蘇州城での攻防戦■

本作の見どころその3は、太平天国軍が立て籠もる蘇州城の包囲作戦における塹壕戦。城に立て籠もる敵を攻略するには何倍もの兵力を必要とするから、パン率いる山軍では到底無理。その結果採られたのが塹壕戦による持久戦だが、そうなる問題は水と食糧だ。舒城におけるド派手な会戦シーンとは正反対の、そんな辛い塹壕戦と其中で生まれるパンとアルフの確執をピーター・チャン監督は見事に浮かびあがらせていく。

1年以上も続く塹壕戦に、このままでは共倒れだと判断したパンはウーヤンと共に食糧、武器調達の嘆願に3大臣を訪れるが、それに対する反応は？他方、アルフが独自の判断で動いたことがその後の大きな悲劇を生むことに。それは、ここまで悲惨な戦いに盗賊村の仲間を巻き込んだことに責任を感じたアルフが、戦いを終結させるべくたった1人で城の中に乗り込み、命懸けで城主ホアンと交渉したこと。ホアンは自らの命と引き換えに蘇州城にたて籠もる餓死寸前の兵士4000人の命を救ってくれと言い残し、アルフはそれを約束したが、これは誰がどう考えても軍律違反。アルフと共に投降してきた太平天国軍4000名に対して、山軍の食糧不足を心配するパンが下した凄まじい決断とは？チャン・イーモウ監督が『王妃の紋章』で見せた王宮の庭における一大スペクタクルは迫力満点だったが、本作はここではあえてスペクタクルを封印し、ピーター・チャン監督らしい涙を誘うシーンとしている。そんな地味に徹した（？）蘇州城攻略作戦をめぐる人間模様の展開が、本作の第3の見どころだ。

■見どころ その4 真の権力はどこに? ■

本作の主演はパン、アルフ、ウーヤンの3人だが、節目節目に登場してくるのがチェン大臣、ジャン大臣、ディー大臣という3人の古老。日本では今、小沢一郎民主党代表に対する西松建設からの献金問題が焦点となっているが、政治の世界や権力者の世界にいろいろなウラがあるのは当たり前。結局カネを持っている政治家が一番強いということになったのでは、これまで何のために政治改革を進めてきたのか、その根本が覆ってしまうことになる。

本作におけるチェン大臣、ジャン大臣、ディー大臣の老獪な働きぶりをみていると、パン、アルフ、ウーヤンたちの命懸けの働きを権力とカネで操り、うまい汁を吸っているのは誰か、ということはどうしても考えてしまう。他方、現在北京では全人代（全国人民代表大会会議）が開催されているが、チベット動乱50年の節目となる3月10日を迎えてチベットでは厳戒体制がとられ、また共産党の一角支配を強化する議論が強まっているようだ。

そんな、こんなを考えながら、私としては本作の見どころ その4として、真の権力はどこに? というテーマを挙げておきたい。

■クライマックスも重厚な人間ドラマに! ■

試写会終了後の某映画関係者の言葉は「泣けた!」というものだったが、本作最大の泣けるシーンはクライマックスにおける人間ドラマ。すなわち、清末四大奇案と言われているウーヤンによるパン暗殺事件の、ピーター・チャン監督流の実況中継だ。

本作のクライマックスシーンは、パンの両江総督就任祝賀式の日を訪れる。剣でも格闘技でも腕前は圧倒的にウーヤンよりパンの方が上だから、最初是不意を突かれて刺されてもパンが負けるはずはない。兵士たちの突入を制止して1人ウーヤンと向き合い、ウーヤンの攻撃に対処しているパンの姿を見ていると、そんな確信が深まっていく。もちろん、パンの方から積極的に反撃してウーヤンを殺そうという意図がないことも明らかだから、どうもこの闘い（暗殺劇）は中途半端なまま引き分け・・・?一瞬そんなことを考えていると、その後思わぬ結末が・・・。

そんないかにもピーター・チャン監督らしいクライマックスにおける人間ドラマは、あなた自身の目でしっかりと。

2009（平成21）年3月11日記